室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華方言における「リ」の具現について
―「リ」と「ル」の区別の消失と残存―

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-11-28 キーワード (Ja): 一つ仮名方言, 椴法華方言, 中舌母音, 接続形式 キーワード (En): 作成者: 島田, 武, 橋本, 邦彦, 塩谷, 亨, 寺田, 昭夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2673

室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

椴法華方言における「リ」の具現について ―「リ」と「ル」の区別の消失と残存―

その他（別言語等）のタイトル	On the realization of /ri/ in Todohokke Japanese
著者	島田　武，橋本　邦彦，塩谷　亨，寺田　昭夫
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	11
ページ	3-8
発行年	2013-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10258/2673

北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 11, 3-8, 2013.

椴法華方言における「リ」の具現について
―「リ」と「ル」の区別の消失と残存―*

島田　武・橋本　邦彦・塩谷　亨・寺田　昭夫

On the realization of /ri/ in Todohokke Japanese

Takeshi SHIMADA, Kunihiko HASHIMOTO,
Toru SHIONOYA, Akio TERADA

要旨：本稿では、椴法華方言における「リ」の発音について、音響分析を通じて検討する。調査で採集された音声資料を聴取すると、本来の「リ」が「ル」として具現化している例が発見された。この音環境は、[ɨ]と[ɯ̈]の区別があいまいになると指摘されたことのないものであった。そこで「リ」と発音されることになっているサンプルを選択し、音響分析を行った。その結果、この音環境に現れる母音は F2 の値に変動が大きく、それゆえ「リ」が「ル」として具現することがあると判明した。一方接続形式の末尾の「リ」は常に「リ」として具現することが示唆された。

キーワード：一つ仮名方言　椴法華方言　中舌母音　接続形式

1.　緒言

椴法華方言は、北海道の東南にある亀田半島の先端に位置している旧椴法華地域において話されている方言である。三方を山に囲まれ、残る一方は海に対するという地理的な条件が注目され、北海道海岸部方言の純粋な形が保存されていると考えられてきた。しかし近年、人口の減少と流動化や函館市への吸収合併によって、椴法華方言は大きく変化している。そのことに危機感を持って、著者らは 2000 年から継続的に椴法華を訪れ、言語と風習を調査してきている。本稿では椴法華方言の音声について１つの報告を行うものである。

2. 先行研究

椴法華方言の話されている地域は、北海道海岸部方言の最も強い下海岸（しもかいがん）と呼ばれる（石垣 1982）。この地域では２種類の中舌母音[ɨ]と[ɯ̈]が用いられている（石垣 1977, 1982）。また、いわゆる一つ仮名方言であると言われているので、「シ」と「ス」、「チ」と「ツ」、「ジ」と「ズ」、「ヂ」と「ヅ」の環境で[ɨ]と[ɯ̈]の区別が曖昧になるとされる（五十嵐三郎 1982、大沢哲夫 1970、平山ほか 1997）。しかし、すべての[ɨ]と[ɯ̈]の区別が曖昧になるわけでない。

(1)　スミ（炭）　シミ（染み）　スス（煤）　シシ（獅子）
(2)　ウミ（海）　ウニ（海胆）

(1)は、母音の区別が曖昧になると言われる例である。一方(2)は 2 種類の中舌母音が区別されて現れている例であり、「ウミ」が「ウム」や「イミ」となったり、「ウニ」が「ウヌ」や「イニ」となったりすることはない。これらのことを島田(2003)では音響分析を行って示している。

以上のように椴法華方言は、四つ仮名の音環境では[ï]と[ɯ̈]の区別が失われるが、その他の音環境では区別が保持されていると考えられる。しかし、実際に調査で採取した音声を分析すると、「リ」と「ル」の環境でも[ï]と[ɯ̈]の区別が曖昧になるという可能性が発見された。そこで以下では、「リ」と「ル」に関して、主に音響分析によって抽出した F1 と F2 の値に注目して、区別の有無を探りたい。

3. 椴法華方言における「リ」と「ル」の区別

前節で見た先行研究によると、[ï]と[ɯ̈]の区別が失われるのはいわゆる四つ仮名の音環境だけであったが、実際には、四つ仮名環境以外の「リ」が「ル」として発話され、[ï]と[ɯ̈]の区別が失われている例がある。

(3)　ヤッパリ　ジッパリ　変ワリナイデス
(4)　踊ッタリ　来タリ　言イトオリ

(3)の「ヤッパリ」という表現には、談話の中で何度も登場する例を観察すると、語末の「リ」がそのまま「リ」と聞こえる例もあれば、「ル」に聞こえる例もある。一方(4)のような例に現れる「リ」に関しては一貫して「リ」として発音されているように聞こえる。

上記の例で興味深いのは(3)のように「リ」が「ル」になる例はあるのに、その逆の例は今までの調査では見当たらないことである。島田(2003)では、椴法華方言の[ï]と[ɯ̈]の中舌性を検討して、どちらの母音も[ɯ]より[i]に近い中舌母音であり、一つ仮名環境では[ɯ̈]が[ï]になると予測しているが、「リ」に関してはその反対の現象が観察されたことになる。また実例を観察すると、(4)のように常に「リ」として現れるものがあるが、その条件が純粋に音声、音韻に関するものであるかどうかを検討する必要がある。

3.1. 椴法華方言の「リ」の音響分析

本節では収集した音声資料の中からいくつか特徴的なものを選び、「リ」の母音の音響的特徴を探る。

3.2. 方法

今回の音声の提供者は、玉村栄吾氏（大正 15 年生まれ、男性）で、2005 年 9 月 28 日に自宅に伺い自由に会話をしているところを録音した。録音は SONY 社製 DAT レコーダ TCD-D100、同社製エレクトレットコンデンサマイクロフォン ECM-MS907 を用い、サンプ

リング周波数 44.1kHz で行った。音声を録音後 Syntrillium 社製 CoolEdit 2000 を用いてサンプリング周波数 8000Hz にダウンサンプリングし、それを Praat を用いてフォルマント解析を行い、第 1 フォルマント(F1)、第 2 フォルマント(F2)の値を求めた。

3.3. 結果と考察

今回玉村氏の発話から得たデータは以下の通りである。

	F1	F2
ヤッパリ 01	516	1407
ジッパリ	481	1423
カワリナイデス	385	1478
ヤッパリ 02	453	1553
トナリムラ	423	1596
シゴジュウネンブリ	332	1615
オドッタリ	489	1626
イウトオリ	374	1636
オチリンゴ	338	1735
ウタッタリ	394	1800
キタリ	472	1804

表 1：「リ」の母音の F1 と F2 の値

	平均値	標準偏差	分散	最大値	最小値
F1	423	63	3968	516	332
F2	1607	137	18697	1804	1407

表 2：「リ」の基本統計量

表 1 のサンプルはそれぞれ下線部の「リ」の母音を計測したものである[1]。文字通り発音されていれば前寄りの中舌母音[ɨ]として現れているはずである。このことを確かめるために、島田(2003)で計測された[ɨ]と[ɯ̈]の F1 と F2 の平均値を参照する。これらのデータも玉村氏の発話を録音したものから作成されている。

	F1	F2
[ɨ]	323	1625
[ɯ̈]	400	1272

表 3：島田(2003)の[ɨ]と[ɯ̈]の F1 と F2 の平均値

[1] 「ヤッパリ 01」と「ヤッパリ 02」は談話の中で別々に発話されたものに番号を付したものである。

表 2 と表 3 を比較すると、「リ」は、F2 は[ï]に近く、F1 は[ü̈]に近い、つまりどちらにも似ていないということになる。しかしこの結論は実際の聴覚印象から隔たっており、平均値を比較するだけでは現実の母音をとらえることができないと思われる。ここで注目したいのが表 2 の標準偏差と分散の値である。どちらの値も数値が大きいほど、ばらつきが大きいことを表している。これらの値を見ると、どちらも F2 のほうが F1 よりも大きい。これは F2 の値のほうが変動幅が大きいことを示しているので、本来「リ」として具現化するはずの音が「ル」として聞こえるとすれば、F2 の値に反映されているはずである。このことに着目して、以下では F2 の値の変動と「リ」の音質の関係を検討する。

3.4. F2 の変動と「リ」の音質について

表 1 で挙げた表現の内、「リ」が「ル」に聞こえるものと、「リ」のまま聞こえるものに分けると以下のようになる。

	F1	F2
ヤッパリ 01	516	1407
ジッパリ	481	1423
カワリナイデス	385	1478

表 4：「ル」と聞こえるもの

	F1	F2
ヤッパリ 02	453	1553
トナリムラ	423	1596
シゴジュウネンブリ	332	1615
オドッタリ	489	1626
イウトオリ	374	1636
オチリンゴ	338	1735
ウタッタリ	394	1800
キタリ	472	1804

表 5：「リ」と聞こえるもの

ここで F2 の値に着目すると、表 4 のサンプルはすべて 1400Hz 台なのに対し、表 5 のサンプルは 1500Hz 以上であり、音響的には 1500Hz 近辺に閾値があると思われる。表 3 を再度参照し、[ï]の F2 の平均値が 1625Hz、[ü̈]の F2 の平均値が 1272Hz であることを考えると、1500Hz から 1600Hz の間で音質の認知が変わるとしても妥当であろう。この点に関してはサンプル数を増やして検証が必要である。

3.5. 「リ」になる要因

前節で「リ」が「ル」と聞こえる要因が F2 の値にあるとしたが、では F2 の値を変動させ

る条件はあるのだろうか。表 4 と表 5 を比較すると、「リ」が「ル」となる確かな条件は見いだせないと思われる[2]。なぜならば同一の形式である「ヤッパリ」の語末が「リ」としても「ル」としても現れているからである。何らかの音環境が条件となって「リ」が「ル」となっているとすれば、「ヤッパリ」は常に「ヤッパル」となるはずである。以上のことを考慮すると[r]の後ろでは[ɨ]と[ɯ̈]が自由に交代可能に見える。

では完全な自由異音としてふるまうのかというとそうではない。表 5 を見ると「オドッタリ」「ウタッタリ」「キタリ」という例があり、これらはどれも「動詞の連用形＋タリ」という形をしているものである。これらの例では F2 の値を見ると分かるように、まぎれのない「リ」として具現化している。これも音環境によっては説明できない。なぜならば音環境だけを見れば「ヤッパリ」と「オドッタリ」は同じ[-ari]という音で終わっており、前後の母音から同じ影響を受けるはずである。しかし実際には、後者の「リ」だけが「ル」とならないのである。

ではこの 2 つを区別できる条件とは何かというと、文を接続する機能を持っているかどうかである。つまり接続形式の末尾の「リ」は常に「リ」として具現すると考えられる。このように考えることによって、「イウトオリ」の「リ」が「オドッタリ」とは音環境が違うにもかかわらず、「ル」にならないことも説明できるのである。

4. 結語

本論文では、椴法華方言における「リ」という音に焦点を当て、その振る舞いを検討してきた。先行研究から考えると、「リ」は常に「リ」として具現化するはずであるが、調査資料によると、実際には以下のように現れる可能性がある。

(5)　「リ」は「ル」としても具現化しうる。ただし(6)の場合を除く。
(6)　接続形式の末尾の「リ」は必ず「リ」として具現する。

今後の展望としては、サンプル数が少数であったことを踏まえて、さらにサンプル数を増やしていくことと、「リ」と「ル」がどのように分布しているのかを検討していきたいと考えている。

謝辞

＊ 本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究Ｃ一般「旧椴法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」課題番号：23520540　研究代表者：橋本邦彦）による研究の成果の一部によるものである。

調査協力者の玉村栄吾氏には長時間にわたるにもかかわらず、録音時に多大な配慮と協力をいただいた。

[2] 1 名の匿名査読者から、母音の交替の要因の存在の可能性の有無についてコメントがあった。確かに調音上の可能性としては、[r]による開口度の増大と舌位置の後退が、音響的には[r]による F3 の下降の影響が考えられる。しかしこれらの点に関しては、本稿のデータから確定的なことは判明しないため、今後の検討課題としたい。

ここに記して感謝を申し上げたい。

また 2 名の匿名査読者の方からは貴重なコメントをいただいたことにお礼申し上げる。本稿における誤りはすべて著者に責任がある。

参考文献

五十嵐三郎(1982)「北海道方言の概説」,『講座方言学４－北海道東北地方の方言－』, p1-62, 国書刊行会.

石垣福雄（1977）『日本語と北海道方言』, 北海道新聞社, 札幌.

石垣福雄(1982)「北海道沿岸部の方言」,『講座方言学４－北海道東北地方の方言－』, p63-92, 国書刊行会.

大沢哲夫（1970）『ほっかいどう語－その発生と変遷－』（五十嵐三郎・長谷川清喜・佐藤誠・石垣福雄・渡辺茂監修）, 北海道新聞社, 札幌.

島田 武(2003)「椴法華方言の中舌母音について」,『認知科学研究』第 2 号, p59-74, 室蘭認知科学研究会.

平山輝男・小野米一・石垣福雄・道場優（1997）『北海道のことば』明治書院, 東京.

執筆者紹介

氏名：島田　武
所属：室蘭工業大学
Email：shim@mmm.muroran-it.ac.jp

氏名：橋本　邦彦
所属：室蘭工業大学
Email：hashimot@mmm.muroran-it.ac.jp

氏名：塩谷　亨
所属：室蘭工業大学
Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp

氏名：寺田　昭夫
室蘭工業大学名誉教授